

私と日本医歯薬アカデミー

岡田 晃

私にとって日本医歯薬アカデミー創立総会は忘れることのできない会であった。開催に際して日本学術会議第七部の旧・現会員に案内状を送って委任状を頂戴した。近藤次郎日本学術会議会長も出席され、7期、8期という古い先輩の先生方も出席され、参加者がたしか50名にも及ぶ盛大なものであった。それまでの苦労を癒し、これからの希望に胸を躍らせたものであった。長い間行われていなかった第七部の同窓会のような雰囲気もあり、誇りとやすらぎ、そして安堵の交錯した会でもあった。

事業としては、財政的な支援が主要な柱であっただけに最も重点となった作業は、賛助会員の募集であった。会員それぞれの人脈を辿りながら、その開拓に忙しかった。はじめは八木國夫副会長のルートの活用が中心となり、それがおおいに役立った。八木会長の後私が第3代会長に就任したが、そんな伝はなく、新しい賛助会員の勧誘は難しかった。その難しさを解決したのが、その時の金岡祐一副会長の手腕であった。日本医歯薬アカデミーの窮状を救ったのは現在の金岡会長であり、まさしく中興の人なのである。金岡先生に次いで賛助会員の紹介の数が多かったのは小林義典理事、私は1社だけ勧誘することができた。平成17年度における賛助会員数は30を数えるに及んだが、この賛助会員の支えによって本会の事業が展開でき、大きな柱になっている。総会にも参加して頂いていて、懇親、交流の実を深めることに心がけている。学問の組織にとって國や産業との綿密な連携を行うことも必要であるが、各界の間で自由に発言・討議することも不可欠であり、その意味で本会は好適な場ともいえよう。

日本医歯薬アカデミーは、日本学術会議の、とくに第七部の夏部会でのシンポジウムの開催の助成に力をいれてきた。さらにこの夏部会におけるシンポジウムを活性化するために現会員ばかりでなく、旧会員にも参加を呼びかけ、そのための便宜もはかってきた。この時には現・旧会員に御夫妻で参加して頂き懇談、懇親の実をあげ、同窓会的機能を充実するとことも図られてきた。平成2年(1990年)には私が世話人になり、金沢で夏部会シンポジウムと懇親会を開催したが、懇親会には御夫人を含めて総勢42名の参加者があり盛況であった。思いがけなく私が第七部長に就任した第15期は私にとってとくに忙しかったような気がする。臨時委員会として「死と医療特別委員会」が設置され、尊厳死を容認する「尊厳死」に関する報告書が第118回総会で承認されたりしたが、この期の夏部会は山田和生会員のお世話によって犬山で開催され、松明の光の中での犬山の鶉飼は印象的であった。夫婦同伴での現・旧会員の交流は全く楽しかった。京都では河合忠一会員のお世話によって夏部会が開催され、表千家のお座敷で抹茶を御馳走になったことはよい思い出になっている。また当時幹事であった金岡祐一会員のお世話になる富山での夏部会では、昼食を県文化財に指定されている旧金岡邸の格天井の座敷で頂いたことも忘れることのできない経験であった。伊藤學而会員のお世話による鹿児島では、知覧で感動し、明治維新に想いを走らせ、小林宏行会員のお世話による長崎ではお座敷も楽しんだ。仙台で開催された夏部会では、多田啓也会員のお世話で秋保温泉「佐勘」での夜を楽しみ、斉藤和雄会員が世話された札幌の夏部会では、はじめて富良野のラベンダー畠の美しさを堪能することができた。青野敏博会員にお世話になった徳島の夏部会では阿波踊りに熱中し、最後の夏部会にもなった函館の夜の美しさは、今も忘れることはで

きない。このように夏部会での集りは、日本医歯薬アカデミーにおける大きな、強い絆をつくっていたのである。今でも夏部会に日本医歯薬アカデミーとして助成をし、力を注いでいるのであるが、七部はなくなり二部になったこともあるが、かつてのような会はもたれておらず、大変残念で淋しいことだと考えている。同窓会的な親睦の会をいつまでも存続したかったのである。アカデミーの事業目的にコロキウム開催のほかに研連シンポジウムの開催助成があるが、これらは事業の大きな柱になっている。このシンポジウムの開催にかかわる助成は、年間 30 件近くに及ぶこともあった。

さて全く余談になるが、私がこのように日本医歯薬アカデミーと密接な関係をもつようになったのも日本学術会議会員に選出されたからである。いわば選挙という壁を乗り越えてきたからであるが、大学人は意外に選挙と無関係ではなく、さまざまな試練に直面することがある。試練というわけではなく仕方なくなる場合もあり、知らぬまに候補になってしまうこともあるのであろう。しかし、多くの場合、本人が選挙活動をしなかったとしても周囲の人が運動をして支えてくれることはあろう。日本学術会議では招集の初日に各部長、会長、副会長などの選挙が行われる。時には全く思いがけないことがおこることがあり、第 15 期の第七部長選挙では第 1 回の投票で過半数の票が私に集まってしまった。候補になるとは全く考えておらず、また推薦依頼など全くしていなかっただけにびっくりした。当選した私の名が呼ばれた時は、まさしく思いがけない気持で一杯になり、その後にはどうすればよいのかという決断が迫ってきた。まさに啞然という言葉がぴったりとした心境であった。このような結果になったのは、恐らく日本医歯薬アカデミーの設立のことや第 14 期に幹事として走り廻ったりしたことが評価されたせいかもしれぬと考えたりしている。とくに日本医歯薬アカデミーの立ち上げに力をそそいだことがそれをもたらしたとも言えるのであり、したがって私にとって日本医歯薬アカデミーは切り離すことのできない存在なのである。

およそこの世に団体や組織などに永遠とか不滅の言葉は縁のないものかもしれぬが、いつまでも続くこと、継続こそ望まれる。日本医歯薬アカデミーも、これまでささやかであったかもしれぬが、医・歯・薬学領域の教育、研究の推進に何らかの貢献をすることができたとして満足すべきなのかもしれぬが、さらに継続、発展するためにも新しい会員の人々のアカデミーへのお力添えを切に期待するのである。

写真⑪を挿入

「創立総会 左より藤原会員、八木副会長、名取会長

写真⑫を挿入

「前列左より脇坂会員、岡田庶務担当理事」

●プロフィール

岡田 晃

第 3 代日本医歯薬アカデミー会長

日本学術会議第 15 期第七部長

日本学術会議第 13～15 期第七部会員

金沢大学長

金沢大学名誉教授